

令和8年度 哲学科総合型選抜

第1次選考 レポート課題

現在、世界各地でさまざまな戦争が起きています。それらの原因となる地域紛争や民族問題をめぐる対立などは、宗教的な要因によって引き起こされているものが数多くあります。

たとえば、2023年10月にハマス（パレスチナのガザ地区を実効支配する武装組織）がイスラエルに大規模な奇襲攻撃を仕掛けたことで対立の激化したパレスチナ問題は、パレスチナという地域をめぐりイスラエルとパレスチナの人々との間の200年以上にも及ぶ闘争ですが、その根底にはユダヤ教とイスラームの聖地をめぐり争いが存在します。

また今年（2025年）の5月にはインドとパキスタンの軍事衝突が起き、本格的な戦争へと発展するのではないかと懸念が世界中に生じました。両国は1947年の分離独立以来3度の戦争を行い、その後も衝突を繰り返してきました。その衝突の原因は、カシュミール（カシミール）という地方がヒンドゥー教徒を主体とするインドか、イスラーム教徒を主体とするパキスタンのどちらに帰属するかという問題です。当時カシュミール地方を治めていた藩王はヒンドゥー教徒でしたので、インドへの帰属を決めたのですが、住民の多くがイスラーム教徒であったことからそれを拒否し、パキスタンへの帰属を求めました。そこで両国はカシュミールに派兵し帰属をめぐり争いが続くことになったのです。この紛争でもヒンドゥー教とイスラームの対立が根底にあります。

現在発生しているさまざまな衝突を引き起こす火種といってもよい「宗教」とはいったい何なのでしょう。こういった側面だけを見れば宗教は人間にとって本当に必要なものなのだろうかという疑問さえ感じてしまいます。

ただ、このような紛争の原因を宗教だけに押しつけてしまうと、単に宗教対立をあおり、激化させかねません。宗教をめぐり問題はさまざまな視点から検討することが重要です。これらの紛争を解決するためには宗教と政治権力との関わりも考慮する必要があります。先に紹介した2つの紛争に関わっているイスラームには政教一致という特徴があり、他方ヨーロッパ社会はキリスト教との長い関わりの中で政教分離が形成されていきます。またインドには古くから身分制度（いわゆるカースト制度）が存在し、宗教に関わる祭司の階級が最上位とされ王族や武士（政治権力）よりも上位となっていました。このようにそれぞれの地域にはそれぞれの宗教があり、長い年月をかけてそれに基づいた価値観が形成されてきているのです。

宗教は紛争の火種の一つにもなり得るものかもしれませんが、この世界から消滅したことは今までに一度もありません。人類の長い歴史の中で、あるときには建国の理念ともなり、国家や為政者を守護するものともなり、多くの人々が救済によって救われてきました。古代の聖人や賢人によって説かれた教えは、時代を超えた永遠の真理として伝承されています。また数多くの宗教者や宗教団体が社会活動や福祉活動などの慈善行為をひたむきに継続してきました。

それでは日本における宗教の現状はどうなっているのでしょうか。日本では宗教への信仰や宗教そのものに関心を持つ人の割合は減少しています。宗教団体に対する信頼や評価も大変低く、アメリカでは8割以上の人が宗教団体を信頼しているのに対し、日本では2割ほどにとどまっています。世論調査の動向を見ると、宗教団体に対する日本人の評価は戦後次第に厳しく、批判的になっていったようです。そこには敗戦をきっかけとして大量に発生した新宗教への警戒とともに、社会や思想界の動揺がありました。またオウム真理教事件や旧統一教会の問題などもその要因となっています。宗教団体への厳しい風当たりの例は他にもあります。日本では1995年の阪神淡路大震災をきっかけに、さまざまな教団が支援活動を行うようになりました。また2011年の東日本大震災でも現在に至るまで、多くの宗教者や教団が支援を続けていますが、宗教ボランティアや特定の教団名を出して活動するボランティアの方々は、一般の人々の非常に強い抵抗感や警戒感を感じてしまったそうです。

宗教に関するいくつかの側面を見てきましたが、人間にとって宗教とはいったい何なのでしょう。どのような意味を持っているのでしょうか。人間にとって宗教は必要なものなのか、あるいは不必要なものなのでしょうか。具体的な事例を挙げながらあなたの考えを1,600字以内で述べてください。